

琉球大学学術リポジトリ

琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的 位置づけをめぐる総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 高良倉吉 公開日: 2009-03-03 キーワード (Ja): トカラ列島, 琉球, 十島村, 中之島, 奄美 キーワード (En): Tokara Islands, Ryukyuan, Toshima village, Nakanosima island, Amami Islands 作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 池田 栄史, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 真栄平, 房明, 豊見山, 和行, 鈴木, 寛之, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Junichi, Ikeda, Yoshifumi, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Maehira, Fusaaki, Tomiyama, Kazuyuki, Suzuki, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008

トカラの民俗

— 沖縄との比較のための覚書 —

赤 嶺 政 信

1 はじめに

本稿は、トカラの民俗について沖縄との比較という視点から取り上げ、それに筆者のコメントを付すものであるが、両民俗文化の本格的な比較研究を行う準備は整っておらず、将来のそのような作業を行うための基礎的な資料整理を行うことを本稿の目標としたい。なお、フィールドワークが実施できなかったために、トカラの民俗資料については既刊の文献に依拠した。

2 悪石島のユミアキをめぐる

最初に、悪石島の葬式3日後のユミアキと呼ばれる儀礼をとりあげたい。儀礼の概要は以下の通りである。

ネーシが死人の寝たあとにアラ物（米・粟）をまきながら、「今日は今日として」と3回唱え、さらに「親でなし、子でなし、百万遍のケンで祓う」と3回いう。ネーシはハダシで玄関から飛び出し、「島繁昌、あと繁昌、ホーイ、ホイホイ」と叫びながらアラ物をまいて行く。これを「マブイを追う」という。たいがい寺まで行く。次にネーシは死人のあった家の中に坐る。しばらくしてネーシに「シケ」（ふるい）が来て、死人の魂がネーシにのり移って、クチをいう。「自分はこうして行ったからあとはこうこう」といったり、葬式を手伝った人に礼を言ったりする[下野 1994 : 118]。

このユミアキは、葬式後も家に滞留していると考えられている死霊を家から追放する目的で行われているようで、「マブイを追う」のマブイは、沖縄で人間の霊魂を意味するマブイという語に通ずる。

このユミアキの儀礼と比較できる沖縄の民俗に、一般にムヌウーイ（モノ追い）と呼ばれる、多くは葬式の日の夜に行われる儀礼がある。

玉城村奥武島では、「死人を寝かせてあったところを「死^{まぶい}魂ヤ出ジリ」と言いながら左足で床を三回叩いて外に飛び出し「ホーハイ、ホーハイ」と叫びながら、西の浜辺に走って行き、松明やサンを捨てる」という[名嘉真・恵原 1979 : 75]。ここでは、悪石島と同じく死霊が家から追われていることがわかるが、河村只雄も、「宮城島では「ポーミチャー」

と称する竹の先に枝を紐でくくりつけたものを「エーホーハイ・エーホーハイ」と言いながら、ビュービュー振って気味悪い音をたてさせて死霊を払う式をお葬式のときやっている」[河村 1999 : 490]と述べ、死霊追放説をとっている。

しかし、沖縄のモノ追い儀礼は別の様相も呈している。南風原町喜屋武の事例では、葬式の日の夜い籠を担いだ人（チューフーシンカ）によってモノ追い儀礼が行われたが、家族の内 2、3 人をムシロで囲み、その中の一人は白位牌と香炉を抱く。チューフーシンカがそのムシロの周囲を、1 人は松明を持ち「アネアネ」と声を発し、二人目の人は板を叩きながら「クネクネ」と応じ、三番目の人は塩をまき、四番目の人が炒った大豆を撒きながら 7 回まわった後、葬家から出てホーハイ・ホーハイと囃しながら村はずれまで行く。

このモノ追い儀礼で、死者の霊魂の依代と考えられる白位牌をムシロで囲んでいることからして、家から追われるモノは死霊以外のモノ（悪霊）であると判断される。喜屋武に隣接する照屋部落のモノ追い儀礼でも白位牌を抱く人がいるが、モノ追いを始める前に「ウドルクナヨ」（驚くなよ）と声を発するのは、白位牌を依代とする死者の霊魂に対して「これからモノ追いを始めるが、驚くなよ」と呼びかけているのだというから、追われるモノが死者の霊魂以外のモノであることがより明白である。

沖縄のモノ追い儀礼の意味については、相反する解釈を許す事例が存在していることになるが、その点は別稿[赤嶺 2002]で論じたので詳細はそれを参照願いたい。

悪石のユミアキの事例では、死霊が家から追われているのは明白であるが、気になることが 1 点ある。それは、引き続いて行われるネーシによる口寄せ儀礼に関してで、死霊を家から追放して後に、なぜ再び家にその死霊を呼び寄せる（ネーシに憑依させる）必要があるのかという点である。

3 死の「穢れ」をめぐって

平島についての「昔は葬式には親戚だけが参加した。ほかの人は不浄をきらう意味である」、および「ガンバコ[棺箱-引用者]をかついだ・・・人たちは飯も別にして死人の家で食べて 3 日間、その間自分の家には帰らない。「ふたいとこが 3 日」といい、親戚の者はふたいとこに至るまで三日間は死人の家において「ひをよむ」のである。親の死の場合は 20 日も親元の家においてひをよんだ」[下野 1994 : 311-2]という報告に注目したい。悪石島でも、死者を棺に納める作業に従事した人（奉公人といい、1 番血の近い人がやる）は、1 週間は家に帰れず死者の家で泊まったという[前掲書 : 116]。かつては、死の不浄の観念が極めて強かったことが窺われる。

関連する沖縄の資料に目を向けると、久高島では、死者が出るとオーチブクチという穢れた状態になり、近親者以外はその家・屋敷の中へ入らない、やむを得ぬ理由で屋敷に入ったとしても、縁側で用事を済ませけっして家屋の中には入らないという。縁側に座った

だけの場合でも、自家に戻ってから特定の井泉の水で家を浄めるという念の入れようである。近親者以外の村人が死者に対して焼香するということもなく、墓まで行くのも限られた近親者である。死者の家に入った近親者は、葬式の日には葬家で泊り、翌日家に帰る。死者の家のオーチブクチの状態は、死後3日目に行われるソージ（清掃）の儀礼が済むまで続くといわれる。

向裔氏家譜の乾隆十三年（1748）の項に「(略) 村中之者相果候砌□□（親類カ）縁者ニ而茂見舞相妨風俗（略）」という宮古の池間島に関する記事がある[玉木 1996：54]。池間島では、親類縁者でさえも死者との対面を避けていた状況が窺える。

4 小宝島の墓をめぐる

小宝島では、地上に棺をサンゴ石で囲む形態の墓があり、死体も風化し棺も朽ち果てるにまかせる、いわゆる風葬形式の葬法が見られる。そのような墓のある一帯をテランヤマと称するが、「テランヤマに葬ったのちは、親が亡くならない限り、盆にも参拝しなかった」[下野 1984：204]という報告に注目したい。いわゆる、墓が祭祀の対象になっていないということになる。報告者の下野敏見は、琉球文化圏の風葬墓はどこも基本的には同じ状況であったと指摘しているが、筆者が確認しえた具体的な資（史）料を以下にあげておく。

「白川氏家譜」の中に、宮古島の水納島に関する次のような記事がある。「(略) 右村之儀往古ヨリ墓所無之、虚説ニ惑墓仕立候儀相嫌、人葬之ハ狭ク正地モ無構方々へ埋節々祭祀ヲモ然々不仕（略）」[平良市史編さん委員会編 1981：190]。すなわち、水納島では死者を方々に埋葬し、その葬地に対する祭祀が全く行われていなかったことが判明する。家譜の記事内容は、模合墓を造って方々の人骨をそこに収めさせ「節々祭祀」も丁寧に行うよう指導することによって「風俗」を改良したこと、および人骨を模合墓にまとめた結果耕地の拡張が可能となったこと、これらの功績によって指導にあたった人物が王府より褒美をもらったという内容で、1766年の出来事である。その当時、「墓」が祭祀対象にならなかったというこの水納島の事例が特例でないのは、次の渡名喜島の史料から推測することができる。

「(略) 且彼島之儀、往古より墓所無之、葬送之時ハ洞ニ葬来候処、南風原初て墓作立候付、所中江も致関心、漸く墓相仕立（略）」[上江洲均 1983：63]。上江洲によれば、この史料は南風原親雲上という人物の「功劳」に対して位階を要請する文書で、1756年の記録だという。南風原親雲上が墓を作るまでは、「洞」が葬所であったことがわかるが、上江洲によれば村から遠地の山の下や中腹あたりに岩間を囲ったばかりの墓が現在でも多数存在するというから、史料中の「洞」はそれにあたると判断される。南風原親雲上およびそれ以前の時代に、その「洞」での祖先祭祀が行われたかどうかは史料からは直接確認できないが、「往古より墓所無之」と認識されているところからすると、先の水納島と同様に祭

祀対象になっていなかった可能性の方が高いように思われる。「洞」が「不便この上ない所」[前掲書：64]にあった点も留意すべきであろう。それに関連して、久高島の事例を挙げておく。

久高島でも、渡名喜島同様、近年になって地上に石造りの墓ができるまでは、死者を納めた棺を崖下にそのままに、あるいは岩陰に石囲いを施した場所に安置するのが主流であった。その一帯をグシヨ（後生）と呼ぶが、そこは葬式や洗骨の時以外に立ち入ることが忌まれる空間で、近年まで（あるいは今日でも）、十六日祭や清明祭、七夕などの機会にも沖縄島のように墓前で祭祀が営まれることはなかった。伊波普猷は、久高島の墓地について、大正12年の現地での見聞に基づき、崖下にたくさんの棺が棕櫚縄あるいは針金で縛りつけられた状態で並んでいるのを確認した上で、「島人は葬式または洗骨の時を除いては、一切この地域内に這入らない。這入った場合には、禊祓をした上で、3日間野宿をしてからでない、家には這入らない」[伊波 1974：26]と報告している。

なお、下野敏見はトカラの墓地に関連するテラという地名について、仏教寺院の「寺」の意で理解できるとしているが[下野 1984：202]、沖縄でも少なからず見られる、やはり墓（人骨）との結びつきの強いテラ地名については、仲松弥秀の別の見解がある[仲松 1993：36-43]ことを付記しておきたい。

5 イタジキバライ

悪石島では、「十五歳の祝いをユーブがたいの祝いというが、その2日目を「イタジキバライといい、元服祝いと同じだが、メシはない。この祝いをしなければ祝いのうちに入らぬといわれる」と報告されている[下野 1994：150]。また、中之島では「葺き籠り祝いの三日目に板敷払いといって、加勢した人々を呼び、接待する。葺き籠り祝いは儀式であるので、盛大な中にも静かな雰囲気があるけど、板敷払いは余興もあつてにぎやかに行う。このときの嘉例良しの桶には白髪というのを肴代わりに与える」という[下野 1986：167]。

喜界島にも、同系統の語彙があるので紹介しておく。結婚式、新築祝い、年祝いなどの際に、諸道具の準備、当日の料理作り、後かたづけを担う人たちのことをオーレーサーと称するが、祝事が済んだ翌日に、そのオーレーサーの労をねぎらうためにもたれる宴のことをイタジチハレー（板敷払い）と呼ぶという[拵嘉一郎 1990：128-9]。

トカラと喜界島のイタシキバライには、本行事を終えて後の宴であるという性格が共通して見られるように思われる。

沖縄のイタシキバラはどうか。「羽地仕置」の「旅行衆之祝儀定」（1667年）の中に「板敷払之刻者親子兄弟無余儀親類者参会軽キ振廻不苦事」という条文が見える[沖縄県沖繩史料編集所編 1981：13]。これが「板敷払」という語の初出であろうか。伊波普猷は、「首

里那覇の婦人等は、男子の海外へ旅立ちした日、その家に集り来り、手拍子や鼓に合わせて、「旅ぐわいにや」を謡ひつつ、輪になつて踊って、之を祝福したが、この風習は日露戦役の頃まで行われていた。古くは畳をかたづけて、床の上で踊ったので、いたとどろ（板轟）と云った」と記している[伊波 1976 : 410]。

石垣博孝は、八重山諸島のイタシキバラについて、「八重山諸島に伝わる旧暦 7 月精霊送りの翌日(7 月 16 日)におこなう行事。村の清浄と村人の健康を守ることを目的とする。古くは八重山一円にあったものと思われるが、現在は波照間・鳩間・小浜・大浜・伊原間などにその形が残っている。語彙は未詳だが、鳴り物とかかわりを持つこと、祓いの要素が強いことなどで、おおよそその輪郭はとらえられる。村人は、3 日間の盆行事で疲れきっているにもかかわらず、鳴り物で集まり排水溝や井戸さらえなどの共同作業をする。そのあと年輩者を中心にして七月念仏（ヒツンガツニンプジャー）で巻踊をし、ウムイヌヤムトゥベと呼ぶ物乞い歌をうたって宴をはる。また獅子舞をして村の祓いをおこなう（略）」と解説している[石垣博孝 1983 : 194]。

首里・那覇の板敷払と八重山のイタシキバラにおいても、トカラや喜界島で見られた後宴の性格は認められそうである。八重山のイタシキバラでは、精霊送りの後の払いの要素が見られるので、イタシキバラのバラを「払い」に結びつける解釈も現地では生まれやすいかと思われる。

「古くは畳をかたづけて、床の上で踊ったので、いたとどろ（板轟）と云った」という伊波の指摘は、板敷払と呼ばれるものの原型を推測するにあたってどのような意味をもつのであろうか。板敷払は、板敷を取っ払うという意味にとるのが素直であるが、伊波の指摘では、取っ払われるのは板敷ではなく畳である。畳が普及する以前の名残が名称の中に残され、かつては文字通りに板敷が「払われた」うえで何かが行われた可能性があると思うが、その場合、何のためにそうする必要があったのかという点が究明されるべき課題となろう。

6 亭主柱

下野敏見は、悪石島の民家の間取りや柱の名称などについて、詳細な図解でもって報告しているが、その中のタイス（亭主）柱と呼ばれる柱の存在に注意を向けたい。「タイス柱の脇にはショミン（蘇民）札を貼ってある。その間を神の前という。もちろん、これはウチガミに対していったものである」、「タイス柱には、敷石との間に七枚銭といって銅貨を七枚敷く」という[下野 1994 : 154]。さらに、同じく悪石島で、髪立てと呼ばれる産育儀礼の中で子どもに新しい着物を着せるが、その際に、ネーシババがタイス柱に合掌し、「着ツツギ、着ツツギ、八重ガサネ、衣裳ハ弱カレ、胴ハ強カレ、石ノゴト、カネノゴト」と唱えてから着せるという報告[十島村誌編集委員会 1995 : 890]も注目される。情報が

十分とは言えないものの、その名称からしても亭主柱が特別な意味を付与された柱であることが窺われる。その他に、中柱、神柱と呼ばれる柱もあるようであるが、特に注意をひく説明は見られない。

柱の名称やそれをめぐる習俗に注目するのは、沖縄でも特に八重山諸島において、「中柱信仰」とでも呼べるような習俗が見出されるからである[赤嶺 1992]。西表島の祖納では、中柱の礎石の下に鉄片を埋めたというのも[前掲書：7]、悪石島の事例との比較ができそうである。

さらに、髪立て儀礼に見られる子どもの新調した着物と柱との関係については、類似のものが沖縄でも見出せる。大正8年の『沖縄朝日新聞』に伊波普猷の「沖縄の俚諺とデモクラシー」という文章が載っていて、その中で伊波は、新調した子どもの着物の襟を柱におしあてて、その母が「着物（チノー）やハラハラ、生命（ヌチエー）やナガナガ」と唱える習俗について触れている[伊波 1976：269]。唱える内容が悪石島のそれとほとんど同じであるのも興味深い。なお、筆者の知る限り、沖縄でも着物をおしあてる柱を中柱と特定する事例が多い点も指摘しておきたい。

7 ガラッパとキジムナー

悪石島では「ガラッパとオヤコになる（親密になる）と魚がよく釣れる。・・ガラッパはもとは大工のドシ（同志）だった。・・山でびっくりすることや道に迷ったり、山で目に塵が入ったり、腹が病んだり、ヘンな音がしたりしたらそれはガラッパの仕業だ。・・ガラッパは春の彼岸に川や海に下り、秋の彼岸に山に上る」という[下野 1994：105-6]。ガラッパの川と山を行き来するという性格は、九州のいわゆる河童伝承にもよく認められる内容である。一方、ガラッパと友だちになると魚がよく釣れる話は、沖縄のキジムナーが漁が得意で、友人となった人間を誘って漁をし獲れた魚は人間にプレゼントする話を想起させる。また、ガラッパが大工のドシであったという点は、沖縄のキジムナーの一性格として、山から木を運び家造りの手伝いをするところがある[赤嶺 1994]ことにつながりそうである。

8 神名

悪石島のネーシによる祝詞の中に、「びろうさもがや」（びろう様から）、「根神やよもい」、「さしかさの御子」という語が登場する[下野 1994：91]。「びろう」は、沖縄でも神聖視されているクバの木のことであり、中之島の里部落にある「地主大明神」という神社の境内には、クバの木が林立しているのを実見することができた。根神は沖縄の村落祭祀に

関わる神職名でもあり、「さすかさ」もオモロに登場する神女名に同じである。また、中之島にはオタケ（御嶽）と呼ばれる聖なる山があり、エガミ嶽と呼ばれる山には根頭八重盛司（ねがみやえもりつかさ）の神を祀ってあるという[十島村誌編集委員会 1981: 91]。オタケは沖縄の御嶽に同じであり、ツカサは『琉球国由来記』記載の御嶽の神名に、たとえば「コバツカサノ御イベ」といった形で頻出すること、さらに宮古や八重山諸島では、村落祭祀に関わる神女のことをツカサと称している点を想起しておきたい。

9 その他

その他については、以下に箇条書きで記しておく。

(1) 下野[1984: 220]の写真のキャプションに、「シコマの日に初穂を供える」と見えるが、琉球文化圏において稲や麦の初穂あるいは初穂祭を意味するシツマ、シキョマ系の言葉と同じであることは明らかである。

(2) 平島では、たとえば「酉の日に死人があると、酉生まれの人は葬式に参加しない。それをトシビという」との報告がある[下野 1994: 311]。沖縄では、12年ごとに巡ってくる生まれ年の厄年のことをトゥシビと呼ぶが、平島の事例を参考にすると、トゥシビは「年忌み」が訛った言葉である可能性がある。

(3) 宝島には、トバシラ（十柱、戸柱）と呼ばれる祭祀に関わる場所がある。このトバシラと沖縄のオモロや地方の歌謡に見える「とはしり」系の言葉や家庭祭祀におけるトハシリをめぐる習俗との関連について、『三国名称図会』などに見える薩摩半島の「戸柱」も視野に入れての小川徹の研究[小川 1996]がある。

【参考文献】

赤嶺政信 1992 「八重山諸島の建築儀礼-中柱信仰とユイピトゥガナシをめぐる-」

『沖縄文化』沖縄文化協会

赤嶺政信 1994 「キジムナーをめぐる若干の問題」

『史料編集室紀要』19、沖縄県立図書館史料編集室

赤嶺政信 2002 「沖縄の葬送文化-その伝統と変容-」国立歴史民俗博物館編

『葬儀と墓の現在』吉川弘文館

石垣博孝 1983 「イタシキバラ」沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』上、

沖縄タイムス社

伊波普猷 1974 「南島古代の葬制」『伊波普猷全集』5、平凡社

伊波普猷 1976 「琉球女人の被服」『伊波普猷全集』11、平凡社

伊波普猷 1976 「沖縄の俚諺とデモクラシー」『伊波普猷全集』11、平凡社

上江洲均 1983 「渡名喜島の三十三年忌祭」『沖縄民俗研究』4、沖縄民俗研究会
小川徹 1996 「新「とはしり」考」『沖縄文化研究』22、法政大学沖縄文化研究所
沖縄県沖縄史料編集所編 1981 『沖縄県史料前近代 1』沖縄県教育委員会
河村只雄 1999 『南方文化の探究』講談社
拵嘉一郎 1990 『喜界島風土記』平凡社
下野敏見 1984 『トビウオ招き』八重岳書房
下野敏見 1986 『南日本民俗の探究』八重岳書房
下野敏見 1994 『トカラ列島民俗誌』第一書房
平良市史編さん委員会編 1981 『平良市史第3巻資料編 1』平良市役所
玉木順彦 1996 『近世先島の生活習俗』ひるぎ社
十島村誌編集委員会編 1995 『十島村誌』十島村
仲松弥秀 1993 『うるまの島の古層』梶社
名嘉真宜勝・恵原義盛 1979 『沖縄・奄美の葬送・墓制』明玄書房

(あかみね まさのぶ 琉球大学法文学部)